

塩を載せた船

小川未明

青空文庫

赤ん坊をおぶった、男の乞食が町へはいってきました。その男は、まだそんなに年をとったというほどではありませんでした。

男の乞食は、りっぱな構えをした家の前へきますと、立ち止まって、考え込みました。それから、おそろおそろの門の中へ入ってゆきました。

「どうか、なにかやってくださいまし。」と、声をふるわせて頼みました。

しかし、家の中では、その小さい声が聞こえなかったものか、返事がありませんでした。乞食は、つぎには、もっと大きな声を出していいました。

「なにか、この哀れな子供にやってくださいまし。」といいました。すると、家の中から、声ばかりで、だれも、顔を出さずに、

「なにも、やるようなものはない！」と、しかるように答えました。

その日は、どういふものか、乞食は、何家へいきましても、同じようなことをいつて断られました。

「こんなに、りっぱな、大きな家に住んでいながら、くれるようなものがないとは、不思議なことだ。」と、乞食は、つくづく思わずにはいられませんでした。

脊中^{せなか}におぶさつてゐる赤ん坊^{あかぼう}が、腹^{はら}が減^へつたので泣^なき出^だしました。乞食^{こじき}は、どうしたらいいか、ほんとうに困^{こま}つてしまいました。

太陽^{たいよう}は、やがて西^{にし}に傾^{かたむ}きかかつています。その日^ひの光^{ひかり}をながめて、ぼんやりと思案^{しあん}にふけていますと、太陽^{たいよう}は、にこやかな円^{まる}い顔^{かお}をして、

「いつまでも、こんな人^{にんじよう}情^{まぢ}のない町^{まち}にいたのではしかたがない。早く^{はや}、日^ひの暮^くれないうちに、ほかの町^{まち}へいったほうがいい。」と、諭^{さと}しているように思^{おも}われました。

男^{おとこ}の乞食^{こじき}は、自分^{じぶん}たちに、不人^{ふにん}情^{じよう}であつた町^{まち}をうらめしそうに、幾^{いく}たびも見^みかえりながら、疲^{つか}れた足^{あし}をひきずつて、とぼとぼと、また遠^{とお}い道^{みち}を歩^{ある}いて、ほかの町^{まち}をさしていったのであります。

それから三日^{みつか}ばかりたちました。ある町^{まち}をあるきまわつていますときに、乞食^{こじき}は、三日^{みつか}ばかり前に自分^{まへ}がたつてきた町^{まち}が、すっかり海嘯^{つなみ}のためにさらわれてしまった、というようなうわさを聞^ききました。

乞食^{こじき}は、夢^{ゆめ}のような氣^きがしました。そして、あの町^{まち}はどうなつたろうと、りっぱな構^{かま}えをした、いろいろな形^{かたち}をしていた家^{うち}などを、目^めに思^{おも}い浮^うかべたのであります。

「人間^{にんげん}というものは、不幸^{ふこう}にあわなければ、人^{にんじよう}情^{じよう}というものを悟^{さと}るものでない。」

と、彼は、いつか聞いた言葉を思い出しました。

「そうだ。あの不しんせつであつた町の人々も、きつと思ひあたつたらう。いまごろはどんなにやさしい人々たちになつてゐるかしれない。きつと、手がなくて弱つてゐるものもあろう。自分のようなものにも、される仕事がないとはかぎらない。どれ、ひとつ、その變つた町へもどつてみようか。」と思ひました。

そして、彼は、いつも、自分の胸に思つたことは、はたしていいかどうかであるかたずねてみるように、太陽を仰いだのであります。

太陽は、あいかかわらず、にこにこしてゐました。

「おまえが、そう思うならいつてみるがいい。」といつてゐるようでありました。乞食は、赤ん坊をおぶつて、いつかたつた町へもどつてゆきました。海辺には、白い、海鳥が空を舞つてゐました。日の光は、彼のゆく道を暖かに照らしてゐました。

まだ、日がまったく沈みきらないうちに、乞食は、その町のあつたところに着きました。きてみると、びっくりしました。一軒として満足な家が建つてゐないばかりか、たいはいは、波にさらわれてしまつたとみえて、一面荒れ果てた野原に變つてゐたのです。人たちは、どうなつたものか、影さえ見えませんでした。ただ、ところどころに木立が

そびえていて、その枝に、髪かみの毛けのからんだようにいろいろなものが引つかかっている、ものすごい、みすばらしい有り様ありさまが見られるばかりでした。

「まあ、こんなになつてしまったのか？」と、彼かれは、その荒あれ果はてた野原のほらの中に立たつて、足あしもとに散ちらばつた材木ざいもくや、ものの壊こわれたのや、大きな家おほうちが建たつていた跡あとらしい、礎いしずえなみどを見みまわしながら、いろいろの思おもひにふけたのです。

彼かれは、あまりのはげしい変かわり方かたと、あわただしいできごとのために、なにを思おもうともなく、しばらくは、ただぼんやりとしていました。

そのうちに、青あおざめた月つきが空そらに上のぼりました。そして、この荒あれはてた景色けしきと、ぼんやりと考かんえ込こんでいる哀あわれな乞食こじきとを照てらしたのです。

そのとき、月つきが、うなだれている乞食こじきの耳みみもとにささやいたのであります。

「大きな海嘯つなみで、みんな沖おきへ持もつていかれてしまった。しかし、まだすこしは残のこつていよう。おまえが、いつかなにかくださいと頼たのんだとき、なにもやるようなものはないといつたが、まあ、あすこをござらん、あんなに光ひかつているものがある。あれはダイヤモンドだ。ぜいたくな女おんなの指ゆびにはめた、指輪ゆびわについていたのだ。まあ、あすこをござらん、あんなにぴかぴか光ひかつているものがある。あれは、強欲ごうよくなじいさんが大だい事にしじまつておいた黄金こがねの

塊だ。しかし、もうみんなその人たちは、どこへかいつてしまった。おそろく永久に

帰ってくることもあるまい。また、その人たちを捜したとて、永久に捜しあてること

ができまい。あの宝は、みんな腐つてしまいか、地の中にしぜんにうずもれてしまうのだ。

おまえはあの宝で、もう一度、りっぱな町をこのところに建てる考えはないか。そうすれ

ば、私は今夜、宝の残っているところを教えてやろう……。」

青ざめた月は、太陽のように、けつして、にこやかな顔はしていなかったけれど、ま

じめになつて、乞食にいいました。

「私みたいなものに、そんなことができようか？」と、乞食はうなだれて思案をしました。

「なに、いっしょうけんめいになつてやれば、できないということはないはずだ。おまえ

にできなかったときは、おまえの子供の時代にできるにちがいない。おまえは赤ん坊をお

ぶつてゐるではないか。」と、月は、はつきりとさえた声でいいました。

乞食は、ついにやつてみる気をおこしました。

「どうか、お月さま、私に宝の落ちてゐるところを教えてください。」と、月を見上げて

願いました。

月の光線は、身軽にどんな狭いところへもくぐり込みました。またどんなものの上へ

もはいまりました。こうして乞食は、月の助けによって、たくさんの宝物を拾い集めることができました。

夜が明けると、太陽が彼を励ましました。乞食は、境遇で貧乏をしましたけれど、りこうで正直な人間でありましたから、四方から、あらゆる方面の知識があり、勤勉に働く人たちを呼び集めて、町を新しく造りはじめたのであります。

数年の後には、その町はりっぱにできあがりました。そして、煙突からは、黒い煙が流れていました。工場や、製造場などが、いくつも建てられました。しかし、だれも、この美しい町が乞食の手によって造られたということを、おそらく知るものがない。かつたでありましょう。

昔の赤ん坊は、大きくなって、いまでは、いい若者となりました。父親は、財産を残して亡くなりました。その後で、若者は、父親の仕事をついで、よく働いていました。

ある日のこと、若者は夢を見ました。

なんでも、あまりにぎやかでない、はじめて通るような町を歩いてゆきました。すると、あちらに白い桃の花だか、すももの花だか、白くこんもりと浮き出たように咲いていま

た。彼は、その花を目あてに歩いていきますと、その木の下に、小さな理髪店がありました。主人というのは、顔つきの四角な人でして、がみがみと小僧をしかっていました。小僧は汚れた白い上着を着て働いていました。顔色が青くて、体がやせて目ばかり大きく飛び出ていました。

「おまえは、どこから雇われてきたのか？」と、若者はたずねますと、小僧は、大きな目に、いっぱい涙をためて、

「私には、お父さんがありません。お母さんもありません。ただ一人の妹がいましたが、いまは、どこにいるか知らないのです。」と答えた。

目がさめると、それは夢でありました。けれど若者は、小僧の顔が、目についていてどうしても離れませんでした。

「私には、弟も、妹もないはずだ。」
彼は、終日、昨夜の夢を思い出して考え込んでいました。

二、三日すると、彼は、また、不思議な夢を見ました。

ある工場で、まだ十三、四の少女が、下を向いて糸を採っていました。すると、いつか夢で見たことのある理髪店の主人よりは、もっと、恐ろしい顔つきをして、黒

い洋服ようふくを着た、脊せの高い男が、ふいに少女しょうじよをむちでなぐりました。

「なにを、ぐずぐずしているのか！」

少女しょうじよは震えあがりました。そして、真まつ赤かな顔かおをして、泣なきながら、せつせと糸いとを採とっていました。

目めがさめると、これもやはり夢ゆめでありました。若者わかものは、どういふものか、この少女しょうじよの顔かおもこのときから忘わすれることができませんでした。

「俺おれは、どうしてこんな夢ゆめを見るのだろう。もつと愉快ゆかいな夢ゆめを、なぜ見ることができないのか。おもしろい、愉快ゆかいな夢ゆめは、みんなほかの人ひとが見つくしてしまったというわけでもないまいが。」と、彼かれは思おもいました。

この世よの中なかにおもしろい、楽しい夢ゆめがなくなってしまった時分じぶんには、どこからか船ふねに乗のせていろいろな夢ゆめをもってきて、港みなとに着ついてから、人ひとの知らぬ間まにまき散ちらすのだと、いつかこの町まちに入はいってきた巫女みこがいったということでした。

どんな船ふねが、どんなような色いろの帆ほを掛かけて夢ゆめを運はこんでくるか、まだだれも見みたものはなかったのです。

ある夜よ、若者わかものは、第三だいの夢ゆめを見みました。

暗い晩に、雪の凍った、細道を歩いてゆくと、あちらから笛を吹いて、とぼとぼ歩いてくる年とつた盲目の女按摩に出あいました。

「おまえさんはこの年になつて、どうしてこんな寒い晩に働かなければならないのか。」と聞きますと、

「私は不幸な女です。最初夫をもつて、かわいらしい男の子が生まれると、夫は、その子供を連れて家を出てしまつたつきり歸つてきませんでした。しかたなく、それから三年ばかりたつてから、私は二番めの夫をもちました。そして、一人の男の子と、一人の女の子を生みました。しかし、私たちの幸福は、長くはつづきませんでした。夫は病氣をして死んでしまいました。まもなく私は目を患つて、両方の目とも見えなくなつてしまいました。私は、二人の子供を親類にあずけました。その親類は、しんせつではありませんでした。二人の子供をどこかへやつてしまいました。それからというもの、私は、所を定めず、さまよつているのであります……。」

目がさめると、それもやはり夢であつたが、どういうものか、その年とつた盲目の女のように、なんとなくみじめで、目から取れませんでした。

若者は、このごろつづけて見た夢が、深く、彼の心をとらえて、仕事も思うように手

につかなく、海辺へ出ては、沖をながめながらぼんやりと暮らしていました。

彼は、父親のいったことを思い出したのです。

「私は、まだほんとうに哀れな人というのを見なかったが、もし、この後、おまえが、哀れな人を見たときは、その人を救つてやらなければならぬ。これが、私のただ一つおまえにいい残しておく、大事なことだ。おまえは、それを守らなければならぬ。」

父親は、子供に向かつてこういいました。若者は、遠く沖の方を赤く色づけて、日の暮れかかる海の上を見ながら、父親のいったことを思い出していたのであります。

「俺の夢は、ほんとうのことなのか？ それなら、俺は、あの哀れな少年と、娘と、あの哀れな子供を失つた母親とを助けてやらなければならぬ。」

ある日、沖に不思議な、見えない船が泊まっていました。若者は、すぐにその船を見つけて、

「どこからきたのだろう。あの船はなにかおもしろい夢を乗せてやってきた、魔の船ではないかしらん。」と思いました。

すると、昼ごろ、年とつた白髪の脊の低い船長が陸に上がってきて、このあたりをぶらぶらと散歩していました。

若者^{わかもの}は、船長^{せんちょう}がそばを通りかかったときに、呼び止めました。

「あの船^{ふね}はどこからきました？ いろいろな夢^{ゆめ}を乗せてくるといううわさの船^{ふね}ではありませんか。」と、若者^{わかもの}はたずねました。すると、船長^{せんちょう}は、大きな口^{おおぐち}を開けて笑^{わら}いました。

「お伽噺^{とぎばなし}に、そんな話^{はなし}があるが、あの船^{ふね}は、そんなものじゃない。毎年^{まいねん}のように、この港^{みなと}へ昔^{むかし}からやってくる船^{ふね}なのじゃ。」

「昔^{むかし}から？」

若者^{わかもの}は、びつくりして、年^{とし}とつた船長^{せんちょう}をながめました。

「おまえさんは、だれなのじゃ。」

船長^{せんちょう}は、こう若者^{わかもの}にたずねました。

若者^{わかもの}は、自分^{じぶん}の父親^{ちちおや}が、海嘯^{つなみ}で滅^{ほろ}びてしまったこの町^{まち}を、ふたたび新^{あた}しく建^たてた人^{ひと}であることを語^{かた}りました。船長^{せんちょう}は、うなずきました。

「なかなかりっぱな町^{まち}になった。私^{わたし}は、昔^{むかし}の町もよく知^しっている。私^{わたし}は、昔^{むかし}から、この町^{まち}に塩^{しお}を積^つんでくるのだ。」と、船長^{せんちょう}はいいました。

「塩^{しお}をですか？」

「そうじゃ、この町では、塩ができないのだ。」と、船長は答えました。

船長は、しばらく若者の顔を見ていましたが、

「おまえさんは、夢でも見なかったかな。」といました。

若者は、このごろになつて、不思議な夢をつづけて見たことを話しました。すると船長は、

「それはみんなほんとうのことなのだ。おまえさんと、おまえさんのお父さんの昔のことを知っているものは、私ばかりじゃ。哀れな小僧や、娘や、母親がいるのは、そんなに遠方の町ではあるまいから、おまえさんはその小僧と娘と盲目の按摩を探しなさがいい。人間というものは、意外なところに、不思議な因縁がつながっているものだ。私は、また来年か、来々年、もう一度この港に塩を積んではいつてこよう。そのときには、不幸な人たちが、しあわせになつて、みんなが喜んでゐる姿を見たいものじゃ。」と、船長はいいました。

若者は、船長の話によつて、深く感動しました。そして、自分には、不幸な母と、腹ちがいの弟と妹があることを知りました。

まったく、あてのない望みを抱いて、彼は、その父の造った美しい町を去つて、終わり

ない旅へと出たのであります。

太陽は、あいかわらず、にこやかに、彼の歩いてゆく道を照らしていました。

「昔、おまえの父は、赤ん坊のおまえをおぶつて、このように、あてもなく歩いたものだ。おまえも希望を捨てずに歩くがいい。」

太陽は、こういいました。

夜になると、若者は、大空の月の光を仰ぎました。月は、また語つたのです。

「町よりも、宝石よりも、どんな富よりも、人間の愛というものは貴いものだ。私は、それらの不幸な人たちを毎夜のように照らしている。おまえは、いつまでも美しい、貴い真心を捨ててはならない。」

若者の旅は、それから、夜となく、昼となくつづきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「童話」

1923（大正12）年5月

※表題は底本では、「塩《しお》を載《の》せた船《ふね》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

塩を載せた船

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>